

震災美談「君が代少年」考

——有事下の愛国心と説話——

伊藤 龍平

はじめに——□承文芸としての「美談」——

□承文芸研究に関心を持ち始めたころ、昔話の三分分類で「動物昔話」「本格昔話」と「笑話」とが横並びに置かれていることに、少なからず違和感を抱いていた。今日になって振りかえると、違和感の源は分類の基準にあったことに気づかされる。世界観を基準に分類される「動物昔話」、内容を基準に分類される「本格昔話」とは異なり、「笑話」は、話し手と聞き手の関係性を基準にして分類されるのである。したがって「笑話」に向く話型はあるが、「笑話」に特有の話型はない。例えば「動物昔話」や「本格昔話」を「笑話」として話す（もしくは、聞く）ことも可能である。笑わせたいという話し手の意図と、笑いたいという聞き手の意図とが交差するところに「笑話」は「笑話」として存在しうる。

「笑話」と「怪談」の親和性もこの点に原因する。既存の昔話分類には「怪談」というカテゴリーがなく、『日本昔話大成』で

も「肉付面」「幽霊の歌」「こんな顔」のようなおおよそ「怪談」としか呼べないような話型までもが「笑話」に分類されている。先学がこれらを「笑話」としたのは、カテゴリーありきの分類だったからだと推察されるが、「怪談」も「笑話」も話の場の力学に依拠しているという点は共通しており、両者の混淆にはそれなりの理由があった。調査の場で、あるいは資料集を読んでいて、これらの話に接した者は、否応もなく前景化される話の場と対峙しなければならぬ¹⁾。

「笑話」や「怪談」のような話の場を意識させるタイプの話は他にもある。一般に「艶話（艶笑譚）」「哀話」「悲話」「佳話」と呼ばれてきた話である。本稿で取り上げる「美談」もその一つである。これらを総称する呼称を考案してもよいが、下手に造語をするとかえって思考が縛られる危険性もあるので、当面は保留としておく。

私なりに「美談」を定義すると、「理想的な生のあり方を説く内容で、話し手（書き手）が聞き手（読み手）に対して、一

定の感情・言動の発露を求めるような話され方をする話」ということになろうか。話の内容ではなく、あくまでも「話され方」によって弁別されるべきである点には留意しておきたい。また、「美談」は特定の時代の産物でもない。今日イメージされる「美談」の多くが近代に隆盛したのは確かだが、その点のみを強調すると、「美談」が抱え込む問題系を矮小化させてしまう恐れがある。近世以前の宗教説話にも「美談」の萌芽は認められるし、現代のメディア報道のなかにも「美談」は認められる。

本稿では、日本統治下台湾の一地方で生まれた「君が代少年」の話を追うことにより、「美談」の性質について考察してみたい。なぜ台湾の例を取り上げるのかというと、近代日本の外地という場所性が「美談」のもつ諸問題を顕在化させるのではないかと思うからである。その結果、口承文芸研究にも一石を投じられればと思う。

一、植民地下台湾の「国語」と「国歌」

昭和十年（一九三五）四月二十一日早朝、台湾中部を襲ったマグニチュード七・一の大地震は、死者三二七九人、負傷者一九七六人という未曾有の被害をもたらした。震源に近い台中州苗栗郡公館庄（現・苗栗縣公館郷）も甚大な被害にみまわれた。被害者の中に、当時、公館公学校三年生の詹徳坤少年もいた（「公学校」は台湾人子弟向けの初等教育機関）。

伝えられる話によると、詹徳坤は震災で負傷し、重篤な状態にありながら国語で恩師の名を呼び続け、最期に「君が代」を歌って息を引き取ったという。いわゆる「君が代少年」の話である。日本内地では『国定教科書』第五期（昭和十七年、文部省）に、台湾では『初等科国語』三（昭和一八年、台湾総督府）に載せられたほか、朝鮮や南洋諸島などの外地の教科書にも載せられた³。地震の起こった昭和十年は、日本の植民地統治が始まってちょうど四十年目に当たる。時局も逼迫していくなか「皇民化教育」が盛んになった時期だった。この時代の台湾で「国語を話すこと」「君が代」を歌うこと⁴にはどのような意味があるのだろうか。次に「君が代少年」が載る『初等科国語』三から「国語の力」という章を引用する。

わが國は、神代このかた萬世一系の天皇をいただき、世界に比なき尊嚴なる國體を擁して今日に至れるが、國語もまた、國初以来、連綿としてその姿を變へず、もつて現在に及べり。されば國語の中には、神代以来の日本人の感情精神をふくみ、國語を使ふわれらをして、知らず知らずのうちに眞の日本人たらしむるなり。われらは國語を用ふることによりて何千年前の日本人と結びつき、又南北一千里をへだつとも、國民と國民とは一心一體となり得るなり。（中略）國語を尊べ。國語を愛せよ。しかし、國語の中に宿れる精神を發揮せよ。國語こそは、國家國民と密接不離の關係を有するものにして、國語を用ひざる國民は完全なる國民にあらずといふも過言ならざるべし。

右に述べられた「国語」の来歴がフィクションであるのは、現在の目で見れば明らかである。いわゆる「国語」は国民国家形成の過程で人工的に創られた言語であり、けっして「國初以來、連綿としてその姿を變へず、もつて現在に及」んでいるようなものではない。近代に生成した「国語」を用いて「何千年前の日本人と結びつ」くというのも無理である。

ここで日本人だから国語を話すのではなく、国語を話すから日本人なのだとされている点は、多民族国家・近代日本の状況をよく表している。「南北二千里をへだつとも、國民と國民とは一心一體となり得る」というのは、帝国に課せられた命題であった。⁵⁾

『初等科國語』三の「國歌」という章でも、次のような架空の歴史が綴られている。

これはわが國體の萬國にすぐれてゐる美しいところで、大君の御代が永久に榮えますやうにと祈り奉る「君が代」の歌詞はこの赤誠をそのまま歌つたものであつて、よく、わが國體や國民精神を現してゐる。(中略)今や御稜威は四方に輝き、八紘為宇の大精神は世界の果まで及ばんとしてゐる。さうして日本人のゐる所、日章旗はひるがへり、日章旗のひるがへる所、必ず「君が代」が奉唱されてゐるのである。

この時代、教科書とは事実を伝えるものではなく、あり得べき理想の世界の姿を伝えるものであった。理想的な生のあり方を説く美談が近代の教科書に親しいのも、このあたりに理由がある。『初等科國語』には「君が代少年」以外に「三勇士」「西

住大尉」「小さい伝令使」「東郷元帥」「サヨンの鐘」「日本の兵隊」「稲むらの火」「水兵の母」「空の軍神」「杉本中佐」等々の美談が収録されている。このうち「サヨンの鐘」が台湾の話、「東郷元帥」「稲村の火」が災害美談で、ほかは軍事美談である。そしていずれの話でも、個々の主人公たちの小さな物語はナショナル・ヒストリーとして大きな物語へと回収されていく。主人公への共感を強えられる美談においては、これらの話を読む台湾の少女少女たちの人生も、帝国日本をかたちづくる小さな物語としてあつた。⁶⁾

副読本として製作されたと思われる『震災美談／君が代少年』(同刊行会、昭和十一年)には、詹徳坤が「學校ごっこ」と称して近所の子どもたちを集め、日本語を教えていたという描写がある。本文には「ほんたうに彼は、國語の詹徳坤でありました」とあるが、同級生の証言を聞く限り、少年がそれほどの日本語能力を有していたとは思えない。しかし「國語の力」の一節にあるように、美談の主人公の行動は「國語の中に宿れる精神」が発揮されたものでなければならなかった。少年が「國語の詹徳坤」になつたのは、死後、美談が生成した後のことである。

二、震災美談群のなかの「君が代少年」

村上政彦『君が代少年』を採して⁷⁾では、昭和十年六月二十九日付『臺灣日日新報』に載る「震災に散つた詹少年」が

「君が代少年」の初出とされているが、管見に入った限りでは『臺灣教育』六月号、及び『社會事業の友』六月号の記事のほうが若干早い。

『臺灣教育』には、公館公学校校長の橋邊一好の「震災に直面して」という文章が載る。ここでは「この不慮の天災によつて私共は教育上尠からざる良い體驗と資料を得たことをせめても喜びとしてゐます」と記したのち、「或る兒童の如きは入院中最後の息を引きとる迄教師の名を呼び續け、臨終に君が代を唱つて瞑目したと等全く感激と悲痛の涙の種であります」と記されている。校長という立場が書かせたにせよ、露骨に過ぎる發言である。橋邊は「君が代少年」を広めたキーマンだが、台湾人に対して差別的な言動が多かつたため、当時を知る地元民の間では評判が悪い。ただ、あるご老人は「あの時代、橋邊のような人間はたくさんいた」と話しており、植民地台湾の日本人の典型だつたともいえる。⁽⁷⁾

同じく『臺灣教育』に載る田春和という生徒（当時、公館公学校六年生）の「臺灣大震災」という作文にも「君が代少年」は記されている。次に該当箇所を引用する。

亦潰された家の爲に頭に重傷を受けた私の學友の詹徳坤（三年生）は早速入院したが、なか／＼直らず、だん／＼重くなりました。病氣で居る間は國語で校長先生、受持の先生、其の他の先生方の名を幾度も／＼呼び續け、今に死なうと言ふ時國歌（君が代）を歌ひながら息を引き取りました。私達

はこんな立派な人を庄に見出し、又學友に持つた事を此の上も無い喜ばしい事だと思ひます。

苗栗周辺の十の公学校と小学校の生徒たちによる「震災に關する兒童の作文」の一つである。学校は美談が話される場であるのと同時に、収集され、生成される場でもあつた。⁽⁸⁾

同じく『臺灣教育』の重信政敏「震災雜感」でも「教育の効果」が見られる例として、以下の五点を挙げているが、ここにも「君が代少年」の記事がある。すなわち、「1 瀕死の重傷を負つた兒童が入院中國語を使用したこと」「2 息を引きとる迄教師の名を呼びつゞけ臨終に君が代を歌つて瞑目したといふこと。（苗栗收容所に於ける公館公學校兒童）」「3 校舍校庭に數百の避難民を收容中、自發率先して便所の清掃奉仕をつゞけた青年二、三名あつたこと」「4 同志を叫合して努力奉仕に當つた青年たち」「5 倒壊家屋をそのまゝに非常時天長節の學校拳式に參列した父兄」の五点である。

重信が挙げた五点のうち、1・2・5番と、3・4番の間には質の違いがある。前者が「國語」「君が代」といった精神性を賞賛しているのに対し、後者は非常時においても冷静に行動をした実性を賞賛している。そして、後者が震災美談のスタンダードであつた。

当時の震災美談群のなかに「君が代少年」を置いてみると、何が言えるだろうか。

【表一】は『臺灣教育』の特集「震災美談」の要約である。

【表1】『臺灣教育』（昭和十年六月号）所収『震災美談』内容要約

	題名	主人公	内容
1	(無題)	黄阿榮	負傷し、家族と先生の安否を確認した後、死去。
2	(無題)	詹德坤 ※公館公3年	負傷し、「君が代」を歌いながら死去。
3	救援に勇む少年王明貴君	王明貴 ※清水公学校	友人を失うも、危険を顧みず、救護活動を行なう。
4	健気な少年呉連青君	呉連青 ※清水公学校	友人を失うも、危険を顧みず、救護活動を行なう。
5	重傷の父を抱へ乍ら	劉日燕 ※製糖農場勤務	弟を失うも、重傷の父の応急手当てをしたあと、救護活動を助け、自衛団を組織する。妹も救護活動。
6	青年団壮丁団が一体となって活躍	※個人名はなし	竹南郡南庄の青年団・壮丁団の活躍。女子青年団の活躍についても。
7	迷信排除の模範	楊肇嘉	遺体に触れると「悪鬼」の祟りに遭うという迷信を打破して遺体を処理する。
8	青年団の活動	※個人名はなし	彰化県和美青年団ほか、各地の青年団の救護活動の動向を伝える。
9	重傷を負ひながら勅語奉安宮を奉遷	張漢津※内埔公学校小使(22歳) 洪中禮(15歳)	息子を失い、自身も重傷を負いながら、勅語奉安宮を守る。また、倒壊寸前の自宅に入り、御尊影を守った少年の話も。
10	教化指導の責任者	輿水武 ※卓蘭公学校長	役場や警察と連絡をとり、救護活動を行ない、迷信を打破する。

11	先生が救護班を組織して負傷者を救	岡田校長	職員を集めて救護活動を行なう。
12	負傷兵の如く横たへられた学童	許實豊 ※石圍墻公学校 4年	祖父を助けようとして重傷を負う。祖父は死亡。
13	少年義勇軍	劉碧玉 ※苗栗公学校高 等科1年	家が半壊し、家族に負傷者を出しながら友人たちと救護活動を行なう。
14	両訓導の働き	曾敬樂・温清浪 ※峨嵋公学校	倒壊しかかった校舎に入り、教育勅語を守る。その後、救護活動を行なう。
15	青年団の威力	※個人名はなし	後龍青年団の活躍。団員はバラックに起居していた。

二話目の無題の話が「君が代少年」だが、全体のなかでは異質な存在となっている。他の話では、身内や友人に犠牲者を出しながらも平常心を保ち、救護活動に専念したという実際的行為が賞賛されているのに対し、本話のみが死の間際に「君が代」を歌ったという精神性が強調されている。これに類するのは、御尊影を守った少年の話（九話）のみである。

一方、【表2】は『震災美談集』（昭和十年、台湾総督府文教局社会課）の要約である。同書には震災にまつわる美談が四十二話載せられているが、「君が代少年」はない。ここでも精神性が強調されている例は少なく（四〇話のみ）、『臺灣教育』と同様に、緊急時にあっても平静を保ち、みずからの危険をかえりみずに救護活動に尽くした人の話が美談として紹介されている。

これらの美談で説かれるのは、愛国心というよりも公共心であった。一連の美談の主人公たちの行動は、目前の被災者の命を助けることに向けられている。そこに「国」は見出せない。しかしながら、ここでの公共心は容易に愛国心に変化するものだった。なぜなら公共心は無際限に適用されるものではなく、おのずと範囲が規定されるからだ。そして公共心が適用される範囲は、概ね「国語」によって規定される国土と同じであった。⁽⁹⁾愛国心を育てるといふ目標は一致しているものの、軍国美談とは異なり、災害美談には直接の「敵」が想定されない。そこで主人公の行為と愛国心との間に公共心という補助線を引く必要があったと思われる。⁽¹⁰⁾そうしたなかにあつて、公共心に触れられない「君が代少年」の話は、この時点では震災美談のなかの異端であつた。

【表2】『震災美談集』内容要約

題名 (無題)	主人公	内容
1	大島健(50歳) ※郵便局長 黄文祖 ※米商	通信手段としての電話を守った郵便局長と、郵便局に寄付をした米商。
2	吉岡 ※大湖郡守	入院中に震災に遭い、病をおして職務を遂行した郡守。
3	木原茂(42歳) ※巡査部長	地震が原因で妻が流産したにもかかわらず、職務を遂行した警察官。
4	周朝棟 ※医師	自宅が被災したにもかかわらず、救護活動をおこなった医師。

5	重傷の父を抱へる	劉日燕 ※製糖農場勤務	↓『臺灣教育』第5話と同じ。
6	死児を妻に委ねて	張傑爾 ※公館庄役場書記	三歳の自分の娘が死亡したにもかかわらず、職務を遂行した役場書記。
7	青年団壮丁団が一体となって活躍	※個人名はなし	↓『臺灣教育』第6話と同じ。
8	哀しくも美し母性愛	林氏玉春(25歳) ※主婦	自宅が倒壊するなか、身を挺して五歳の長男を助けた母親。母親は死亡。
9	迷信排除の模範	楊肇嘉 ※職業不明	↓『臺灣教育』第7話と同じ。
10	接骨医の奉仕	林齋媒 ※接骨医	震災後すぐに被災地に駆けつけて、救護活動をおこなった医師。
11	母を失った警察官	張世遠 ※巡査	地震で母親が死亡したにもかかわらず、職務を遂行した警察官。
12	医は仁	陳春 ※医師	地震で長男を亡くしたにもかかわらず、救護活動をおこなった医師。
13	青年団の活動	※個人名はなし	↓『臺灣教育』第8話と同じ。
14	重傷を負ひながら勅語奉安宮を奉遷	張漢津(22歳) ※公学校小使 洪中禮(15歳) ※公学校生徒	↓『臺灣教育』第9話と同じ。
15	教化指導の責任者	興水武 ※公学校校長	↓『臺灣教育』第10話と同じ。
16	使命を果たすは此の時	謝源水 ※壮丁団長	震災直後、迅速に壮丁団を組織し、警備・救護活動をおこなった団長。
17	崩壊せる家に潜入して隣家の親子を救ふ	黄演旗 ※公学校訓導	身の危険をかえりみず、崩壊した家に入り、母親と子どもを救った訓導。

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
少年義勇軍	他庄に出勤	父子手を分けて救助に	産婆さん看護婦に	奇特な竹屋さん	幾多の人命を救ふ	自己を捨て、他の為	責任を果すは此の機会	壮絶涙ぐまし	一市民のこの心	負傷兵の如く横たへられた学童	先生が救護班を組織して負傷者を救助
劉碧玉 ※公学校高等科生徒	※個人名はなし	陳阿水(54歳) ※保正	林氏四英 ※産婆	江東亮 ※竹細工職人	江有亮(30歳) ※保正代理	邱海山(27歳) ※壮丁	劉阿坤(54歳) ※保正	曾燦輝(25歳) ※壮丁	陳成器(38歳) ※職業不明	許實豊 ※公学校生徒	岡田 ※公学校校長
↓『臺灣教育』第13話と同じ。	自分たちの庄の被害も大きかったのに、救護活動をおこなった壮丁。	自宅が被災したにもかかわらず、救護活動をおこなった保正。	自宅が被災したにもかかわらず、看護婦として活動をおこなった産婆。	自分の工場を被災者收容のために開放し、バラック建設のために竹材を提供した竹細工職人。	危険を顧みず、救護活動をおこない、また、迷信を打破した保正代理。	父親が安否不明にもかかわらず、警備・救護活動をおこなった壮丁。	自宅が被災したにもかかわらず、遺体の処理をおこなう。	妻子を失い、非常召集を免除されたにもかかわらず、警備・救護活動をおこなった壮丁。	救護活動と寄付金で貢献した一般人。	↓『臺灣教育』第12話と同じ。	↓『臺灣教育』第11話と同じ。

42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
救援出道中に妻と永別	喪心の母をいたわりつ、	徒歩で郡役所に急報	身を捨て、妹を庇ふ	揺れる役場の屋根に登って	青年団の威力	五十箇所の避難所を二日で	子の看護も忘れ	小屋掛材料を頒つ	両訓導の働き	負傷の身を以て	余震しげき中に精米	身を尽して救護
園部友義 ※軍人(上等兵)	呉連青 ※公学校生徒	兒島高英 ※公学校校長	王氏業 ※公学校生徒	杜世存 ※庄役場給仕	※個人名はなし	渋谷由太郎(26歳) ※製竹工場勤務	蔡朝陽・盧阿頼・劉福森 ※庄役場勤務	彭阿東 ※職業不明	曾敬業・温清浪 ※峨帽公学校教員	曾明嶽 ※職業不明	楊燦松 ※精米業	寺田五郎 ※医師
病気で重体の妻をかえりみず、救護隊に参加した軍人。妻は死亡。	家族を失いながらも、母親を励ましつつ弔いをし、仮小屋を建てた少年。	震災後、教育勸語を宿舍に保管し、教員たちと救護活動をした校長。	五歳の妹を助けようとして圧死した少女。妹は助かる。	余震の続くなか、役場の屋根に上り、警鐘を鳴らした役場給仕。	↓『臺灣教育』第15話と同じ。	自宅が被災しながらも、部下の土工たちと避難所五十か所を建設した製竹業者。	自分の子どもが死亡したにもかかわらず、職務を遂行した役人たち。	自分の山の木を伐って仮小屋建設の材木を提供し、義援金も出した人。	↓『臺灣教育』第14話と同じ。	自宅が被災したにもかかわらず、救護活動をおこなった人。	自宅が被災したにもかかわらず、被災者に米を配った精米業者。	震災後すぐに被災地に行き、救護活動をおこなった医師。

三、証言・詹徳坤^{せんとくこん}

それでは「君が代少年」こと詹徳坤とは、どのような人物だったのだろうか。

過日、生前の詹徳坤を知る徐慶松さん（一九二六生、男性・陳秋香さん（一九二六生、女性）さんご夫妻からお話を伺った。二人とも家の方向が同じだったので、詹徳坤と一緒に登下校をしていたそうだ。徐さんの記憶のなかの詹徳坤は「暴れん坊」で、放課後、よく騎馬戦や竹鉄砲、陣取り合戦などをして遊んだという。陳さんは女の子なのであまり交流はなかったが、詹徳坤がグループのリーダー格だった印象があるという。

戦前、公館公学校（現・公館國民小學）の校門前に詹徳坤の銅像が建っていたが、戦後は国民党政府によって撤去された⁽¹¹⁾。そのあたりの経緯について、ご夫妻はこう述べている。⁽¹²⁾

陳…あの銅像、破壊されて、向こうがね、かついで帰って、家のほうに置いた。

——家に？——

陳…置いた。破壊されてしまったの。そして、あとで向こうは丘に住んでるでしょ？ 食用水ね、山を下りて、泉州の水をかついで帰って使用するでしょ？ とても苦勞するから、この銅像を売って……。

徐…ポンプ買った。

陳…ポンプ買った。モーター買った。あの銅像のお金でポンプ買った。だから、うちの人は「あの伯父さんのおかげでね、水、かつがなくてもいい」って言って（笑）。

詹徳坤の弟はいまもご健在で、両親も戦後まで生きた。美談の主人公を肉親にもつことは、地域を生きるうえでどういう意味をもつのだろう。右の証言にも軽い揶揄の感情が見て取れるが、両親が日本政府（もしくは、台湾総督府）から大金をもらったという噂（事実か否かは不明）が戦前も戦後も地域内で広まっていた、遺族は肩身の狭い思いをしていたらしい。⁽¹³⁾

詹徳坤の幼馴染みだった謝春梅さん（一九二二生、男性）は、次のようなお話をしてくださった。御歳九十で現役の医師である謝さんは、医学的見地から所見を述べている。⁽¹⁴⁾

「君が代」を歌ったっていうのは、わたしたちの保正^{ほせい}さんの息子さん、大きい息子さん。詹徳坤の……この人がいちばん先に、消息を話したのはこの人ですよ。陳漢初先生といつてね。（中略）この人が……聞けば、詹徳坤の入院しているところをね、話によれば、先生も行っていないという。校長先生も行っていないという。ところが、陳捷順さん（注・陳漢初^{はんしゅ}の父）は行っていたんです。

——陳捷順さんが行っていたんですか——
いや、違う。陳漢初さん。

——詹徳坤が亡くなるところを？——

そう。おそらくは破傷風じゃないかと。細菌感染でね。破

傷風か何か、結局は細菌感染ですよ、敗血症か何かで、高熱を出して、歌を歌ったという。あのときは国民学校の三年生で、毎日、朝会ときに「君が代」を歌いますんで、それでその歌がいちばん慣れているというわけですよ（笑）。わたしたちもみな同じですよ。ただ、自然的に……わたしはそう思いますが、わたしは聞いてませんが。その陳漢初先生が、詹徳坤が亡くなる前に「君が代」みたいな歌を歌ったって。

——陳漢初さんがそういうふう証言したと？——
ええ。それを校長先生に報告したんですよ。

謝さんの証言によれば、保正を務めていた陳漢初という人物が、詹徳坤の末期の様子を公館公学校校長の橋邊一好に話したのが、美談生成の契機になったという。保正という社会的地位が、話の信用度を高めたのだろう。謝さんは次のようにも話している。

——はじめ「君が代少年」の話を聞いたのは？——
亡くなったとたんですよ。みんなそういう噂、すぐに広まって。亡くなって数日ですね。わたしたちは詹徳坤が死ぬ前に「君が代」を歌ったって聞いて、当時、わたしたちは感心したんですよ。

この証言からは、世間に知られる以前、地元民の間ですら詹徳坤の話が知られていたのが窺える。また、「感心した」という発言から、当時の謝さんが、詹徳坤の最期の言動を讚美する感情を抱いていたのが判る。主語が「わたしたち」と複数

形である点にも留意したい。為政者によって取りあげられる以前から、美談の萌芽は認められていたのである。

四、その後の「君が代少年」

一口に美談といっても、為政者によって提供される場合（仮に「国家美談」とする）と、為政者の介在なくして生ずる場合（同じく「民間美談」とする）の二つのパターンがある。¹⁵⁾

「君が代少年」の場合、地元で囁かれていた民間美談が、為政者に絡めとられて教材とされ、国家美談化した。契機となったのは、保正の陳漢初や公学校校長の橋邊一好といった地域の人の活動だが、美談生成の過程ではメディアの果たした役割も大きかった。¹⁶⁾

『臺灣日日新報』に「震災に散つた詹少年」を書いた柴山武矩は、「社會事業の友」の「震災あとがき」でも「君が代少年」に触れている。柴山は雑誌『改造』の記者だが、若山牧水門下の詩人でもあった。関東大震災の際にも「震災直後の東海道を歩き、震災に絡まる美談や哀話を拾ひ歩いた」¹⁷⁾そうで、善行調査員のようなことをしていたらしい。そして美談や哀話を書き記す際に、柴山の小説家的想像力が働いていたことは想像に難くない。

「震災あとがき」の「君が代少年」に触れた箇所では、詹徳坤の最期の場面の直前に、「此處まで書いて来て、私の眼はうるむ」と、柴山個人の感想が挟まれている。『社會事業の友』という雑

誌の性質上、当局の意向が反映しているのは否めないが、柴山個人も少年の死に感動し、この話を積極的に伝えようという意思があつて筆を執つたのが窺える。そのときの柴山の脳裏には、読者の理想の反応——つまりは、感動の共有——があつたはずである。これこそが美談の条件であつた。読む側は、柴山の意図に共感するにせよ反発するにせよ、美談というモードに仕組まれた磁場と対峙しなければならない。

「君が代少年」が美談であつたのは、「大君の御代が永久に榮えますやうにと祈り奉る「君が代」の歌詞はこの赤誠をそのまま歌つたもの」（先述『初等科國語』三、「國歌」より）とされていたからである。それでは、今日、台湾の老人たちが「君が代少年」を話すとき、どのような感情が込められているのだろうか。謝さんは「君が代少年」の真相について、こうも述べている。

わたしが考えるところでは、これは完全に自然のなりゆきです。こういう結果は自然です。毎日「君が代」「君が代」以外に歌う歌ないんです。こういう皇民化教育の……。わたしも以前、日本精神が強い。いまでもわたし、日本精神が強いんです。

謝さんは詹徳坤が「君が代」を歌つた理由を高熱にうなされたせいとしていた。それがここでは皇民化教育の結果とされていく。いずれにせよ、謝さんは「君が代」を歌うという行為の背後に、天皇への「赤誠」を認めていない。要するに、私と謝さんとで生

起した話の場では「君が代少年」は美談として成立しなかった。

今回、苗栗市や公館郷の界限で、二十人ほどのご老人から「君が代少年」の話聞いた。地元ということもあつて、詳しくお話ししてくださいでしたが、それらを美談と呼ぶことはできない。というのも、話者たちは「君が代少年」を日本統治時代のエピソードの一つとして淡々と——時には悲劇として、時には義憤を滲ませながら——話しており、聞き手に対して主人公の行為への共感をうながすような話し方をしていないからである。

それでは、台湾の若い世代はどうだろうか。偶然なのだが、私の教え子の簡千慈さん（南台科技大学三年、女子）は、公館國民小學（公館公学校の後裔）の卒業生である。詹徳坤の遙か後輩に当たるわけだが、訊いてみたところ、彼女は「君が代少年」を知らなかった。現代の台湾では「君が代少年」は話の動機を失っている¹⁸。

ただし、地元では、美談とは別の話し口で「君が代少年」は復活しつつある。公館國民小學の校史『百齡搖籃／歴史彌新』（二〇〇一、公館國民小學）には、真偽については保留しつつも、詹徳坤の逸話を詳細に紹介している。他にも管見に入った限りでは、『苗栗風土記事』（二〇〇二、苗栗縣社區大學）、『隘寮下』一五四号（二〇一〇、公館學習中心）などに「君が代少年」が取りあげられている（「社區大學」「學習中心」は「カルチャーセンター」の意）。地域史を語る枠組みのなかで、「君が代少年」は蘇りつつある。なかには『國歌少年詹徳坤的故事』（二〇一〇、

公館學習中心)のような単行本まで作られた。ここでは日本統治時代の『初等科國語』の「君が代少年」の文章が中国語訳されて載せられている。

二〇〇〇年代に入って急に出版活動が盛んになったのには、台湾民主化という時代背景が関係している。事実、国民党政府の影が色濃かった時期に編まれた『公館郷誌』(一九九四)には「君が代少年」の記事はない。それが昨今では、歴史教科書のなかに植民地時代の逸話として「君が代少年」は登場している。¹⁹⁾どこまでも教科書と縁の深い話である。

おわりに —— 現在学としての美談 ——

『震災美談／君が代少年』には「銅像になった詹徳坤」という後日譚が載せられており、民間から集まった義援金により、銅像が建てられるにいたる顛末が記されている。美談に共鳴したのは(あるいは、共鳴させようとしたのは)、台湾島内のみならず、当時の帝国日本の版図に住み、同じ国語で意思を疎通し合える「日本人」たちであった。

「君が代少年」に限らず、「美談」はあるときは自然発生的に生じ、あるときは為政者の意図を受けて提供される。そしていずれの場合でも、話し手(書き手)は、聞き手(読み手)に対して、話の内容への共感を求める。この力関係をここでは「権力」という言葉で呼んでみたい。この権力は双方向性のもので、聞

き手(読み手)が、話し手(書き手)に対して、権力の行使を要請する——「美談」を欲する——場合もある。

享受者の側に立った場合、震災美談を必要としているは誰だろうか。被災者当人でないのは確かだが、被災者と無縁の人々でもない。被災者と同じ当事者意識を持ちながらも、直接には被災していない人々が、心の平安を得るために美談を欲した。戦争美談において、戦地に身を置かない人々が美談を享受していたのと同じである。この構図は、為政者が国民に心の平安を与えるために美談を提供するのと、対をなしていた。

そして災害美談において、話し手(書き手)／聞き手(読み手)という関係から零れ落ちるのは話され(書かれ)、聞かれる(読まれる)立場にある被災者たちの姿である。先に話し手(書き手)／聞き手(読み手)の間で結ばれる関係を「権力」という語で理解したが、その権力関係の外に置かれる被災者は、災害美談の構図における絶対的な弱者と位置づけられる。

ここで話を東日本大震災後の状況にトレースしてみよう。あの震災でも、被災者たちが暴動略奪を起こさず、秩序を守って行動したことが海外のメディアでも大きく報じられた。「君が代少年」の話を生んだ昭和十年の台湾大地震の際に、被災者たちの秩序立った行動が美談とされていたことが想起される。メディアによって報じられる「理想的な被災者たちの行動」が、被災者の自由な感情の発露を阻害したことは想像に難くない。昭和十年の台湾大地震の美談の折、為政者(台湾総督府)が行

なつたのと同じことを、民間のメディアが、善意にもとづいて行なった。その背景には、未曾有の国難に見舞われた直後にあって、心の平安を求める聞き手（読み手）の要求があつたはずである。⁽²⁰⁾

「美談」が抱える問題系によって見えてくるのは、人と説話との関わり方の問題である。東日本大震災後、有事下にあつたこの国で流布された大小さまざまな言葉の群れを、過去の知見の蓄積を踏まえて、どの程度、解析し発言していけるかは、口承文芸研究が現在学であるための試金石になるだろう。

注

(1) 口承文芸研究史における「怪談」の位置づけについては、高木史人「怪談の階段」（『学校の怪談』はささやく）二〇〇五 青弓社）に言及がある。

(2) 関連論考として、拙稿「台湾の美談の行方―ある日本人教師の碑をめぐって―」（『口承文芸研究』三四 二〇一〇）を挙げておく。

(3) 「君が代少年」の顛末については、村上政彦『君が代少年』を探して（二〇〇二、平凡社）に詳しい。

(4) 引用は、二〇〇三年、南天書局（台湾）から刊行された復刻本に拠った。

(5) 「国語」の成り立ちが孕む政治性については、イ・ソンヨク『国語』という思想―近代日本の言語認識―

（一九九六 岩波書店）参照。

(6) 日本における国民国家形成過程について、マティマス・フェイファーは「ヨーロッパと違って、国民国家としての意識は、市民運動の自由主義的努力とは結びついていない。日本で明治時代以来からの国民国家は、最初から、国家を主導・形成した寡頭制の支配下にあつた」と述べている。マティマス・フェイファー「犠牲の美学―美的価値観念で論じられた愛国心―」（『国際関係・比較文化研究』一〇―）参照。

(7) 『社会事業の友』には、詹徳坤の担任だった大岩根直幸の文章もあり、そこでも「君が代少年」の話が載せられている。教え子たちの語る大岩根の評判は総じて良いが、担任になった直後の四月に地震にあつたため、詹徳坤との関係は希薄だったはずだという。

(8) 『社会事業の友』にも「ちしん」と題する生徒の作文集が載せられており、「君が代少年」に触れた生徒も二人いる。ともに公館公学校三年生で、詹徳坤の同級生だった。

(9) 公共心を説くのは、日本統治下台湾の美談集の特徴でもあつた。徴兵義務を負わない植民地下の台湾人にとって、戦場は直接赴く場所ではなく、「銃後」を守る者の心得として公共心が説かれるのである。

(10) 公共心を利己主義と対立するものとし、愛国心を利己主義と対立しないものとする中村清は「戦前の教育は、個人的利己主義を国家的利己主義で置き換え、それをあた

かも公共心であるかのように装っていた」と述べている。中村清「公共心と愛国心」(宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要)二六(二〇〇三)参照。

- (11) 美談とモニュメントの関係については、葛西周「歌われた「美談」―音楽をつうじた近代日本のイメージ戦略―」(演劇映像学)三(二〇一〇)に考察がある。葛西論文では「六氏先生」「呉鳳」「サヨンの鐘」など、台湾の美談の例についても言及されている。

- (12) お話は二〇二二年五月五日、徐慶松さん宅で日本語で伺った。同時代の世間話を美談化するときに生ずる虚像と実像の落差については、石井雍大が「太郎やあい」を例にレポートしている。石井雍大「つくられた愛国心「太郎やあい」」(季論)二一八(二〇二〇)参照。

- (14) お話は二〇二二年五月五日、謝春梅さん宅で日本語で伺った。
- (15) 大野芳は、戦後、パロン西の最期にまつわる美談が生成していく過程を追っている。大野によれば、西の直属の部下だった人物が、遺族を喜ばせるために美談を作った旨を話したとのことで、これが事実ならば、民間で生じた戦争美談である。大野芳「虚報」が生み出した戦争美談」(潮)五七〇(二〇〇六)参照。

- (16) 重信幸彦は、増田神社と久松五勇士を例に、近代国家・日本の一地方の出来事が、メディアの波に乗って、その記憶が刻まれた場所を離れて「美談」として喧伝されて

いくさまを論じ、さらに「美談」が郷土と不可分に結びついていたことから、伝説との比較を試みている。重信幸彦「近代の「美談」と「伝説」という問い」(『國文學・解釈と鑑賞』七〇―一〇(二〇〇五))

- (17) 柴山武矩「震災あとがき」『社會事業の友』昭和一〇年(一九三五)六月号(第七九号)臺灣社會事業協會

- (18) ネット動画に、高雄市三民高級中學(高等学校)の学生による自主製作ドラマ「歴史劇―國歌少年」(二〇〇八)がアップされている。内容は「君が代少年」そのままだが、主人公が歌うのは「君が代」ではなく、中華民國の国歌となっている。

- (19) 『普通高級中學・歴史』第一冊(二〇〇六、翰林出版※台湾)に、植民地下の皇民化政策の例として「サヨンの鐘」とともに載せられている。

- (20) 石井光太によると、関東大震災の折にも海外のメディアが「日本人の規律ある避難行動」を賞賛したという。吉村昭「関東大震災」(一九七三、文藝春秋社)を引きながら、これが事実と異なるのを指摘した石井は、マスメディアの自主規制の問題に踏み込んでいる。石井光太「美談を戒める―「関東大震災」の凄絶なる光景―」『文藝春秋』八九―一〇(二〇一一)

(いとう・りょうへい／台湾・南台科技大学)